

そこで、以前より報告されている義務教育から高等学校までの16の学習のつまずきをもとに、歯科技工実習の実習指導との比較、検討を試みた。すると、Ⅰ：習熟練習を増やすことでクリアできる→反復実習、Ⅱ：再度、概念規定の部分からやり直す→実習説明・復習（ミニテスト等）、Ⅲ：言葉の学習をきちんとする→講義・実習説明となった。さらに、自己の進行状況を自覚するためにⅣ：目標設定→行動スケジュールの明確化も追加が必要と思われた。

学生が十分に理解できる実習指導は、反復実習、復習（ミニテスト等）、講義、行動スケジュールの明確化が肝要といえる。今後は、個別指導による放牧型、徘徊型実習とならないような指導について検討していきたいと考える。

入学時の基礎学力と国家試験の成績

大平芳則（言語聴覚学専攻）

基礎学力と国家試験（国試）の成績との相関を調べることにより、基礎学力をもとに、国試合格に向け、特定の学生に対し特別な指導が必要かどうかについての情報を得られないか検討することを目的とした。

対象は、2009年度以降、本専攻科に入学し基礎学力試験を受験した25人とした。このうち、すでに専攻科を修了して国試を受験し自己採点を行なった者は15人であった。基礎学力試験として新潟県公立高校の入試問題のうち、国語、英語、数学を実施するとともに、国試を受験した学生自身が自己採点を行ない、両者の相関を調査した。

その結果、科目ごとの平均は国語70.8、英語61.2、数学37.3で、3科目の平均は56.4であった。また、国試自己採点の平均は67.8（100点換算）であった。国試との相関係数は、国語： $r=0.43$ 、英語： $r=0.79$ 、数学： $r=0.67$ 、3科目平均： $r=0.81$ 、であった。基礎学力が高くない学生でも、国試に合格する者もいる。そのような学生は、努力を積み重ね長い学習時間を確保して学習能力の不十分さを補っている。したがって、十分な基礎学力を有していない学生に対しては、入学早期より学習習慣を身につけるよう重点的に指導することにより、国試合格に導くことが可能と考える。

第63回（通算第146回）：2013年6月27日（木）

（座長：金子 潤）

キャリアスキルⅡにおける 実習指導について

佐々木聡（歯科技工士学科）

古代エジプト人の「人間」観

内田杉彦（歯科衛生士学科）

独自の来世信仰を生み出した古代エジプト人は、来世を現世の延長とみており、現世で生きるために不可欠な要素は来世でも必要と信じていた。彼らが遺体をミイラとしたのは、生前の生活に欠かせない「肉体」は来世でも必要とみていたためであろう。「肉体」の機能の中心とされていた心臓は、理性や感情、記憶のよりどころともみなされていた。しかし人間が生きるには肉体だけで十分ではなく、肉体に宿ってそれを機能させるものも必要と考えられていた。カァ（「生命力」）は人間が生きている間は「肉体」に宿り、死とともに「肉体」を離れるとされた。死者が来世に復活するためには遺体を保存し、そこにこのカァを戻すことが必要とされ、そのための葬祭儀礼が行われていたのである。やはり「肉体」に宿り、死後は日中だけ墓の外に出て自由に移動できるとされたバァ（「靈魂」）のほか、「影」や「名前」も人間の構成要素として重視された。バァと「影」はおそらく、陽光に照らされた現世の生活を死後も続けたいという願望の現れであり、「名前」はそれを持つ人間と家族や共同体とのつながりを保つ鍵であって、共同体の絆のなかで生きるのが人間であるという価値観を示すものだろう。古代エジプト人の「人間観」は、「死」と対峙した彼らが「人間として生きるとはどういうことか」という問題を追究した結果と言える。